

説教 『不信仰な私、の信仰』 山本 護 牧師  
聖書 マルコによる福音書 9:14~24

今週10月31日は宗教改革記念日。改革第一の特徴は「sola gratia=恵みのみ」「sola fide=信仰のみ」「sola scriptura=聖書のみ」という「~のみの信仰」。後代の諸制度を取り払い、キリストの「本質のみ」を志向する信仰覚醒運動であったが、今や何を削ぎ落せば信仰覚醒につながるのか。信仰の基は祈りであり、祈りは神の御前に「偽りなく」立つこと。この祈りの覚悟はしっかり持っていたい。

弟子たちはイエスから、癒しの権能を授かっていたが(マルコ 6:7)、それがうまくいかず(9:18)、癒すという目的そっちのけで議論に逃げていた(9:14)。そんな弟子にイエスは幻滅を隠さない(9:19)。現代なら「癲癩」と診断されるだろう息子の病状はひどく(9:18,20)、病歴も長かった(9:21)。イエスの力で息子は回復するが(9:27)、一時は死んだようになった(9:26)。それほどに悪霊の支配は根深く、人を蹂躪し(9:20)、力を誇示してやまない(9:22)。悪霊の意図は、あたかも人間に備わった暗黒そのもの。

「霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました(9:22)」という父親の言葉に積年の苦悩が窺われる。父親は「おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください(9:22)」と求めた。控えめな「おできになるなら」という言葉に対し、イエスは「[できれば]と言うか(9:23)」と怒りの表現で応じた。良識的な彼の態度にイエスは何を感じとったのか。父親は「期待してもう絶望したくない」と無意識に思っていたのかもしれない。あるいは「偉い先生に恥をかかせちゃ悪い」と斟酌したか、「弟子がダメだったから師も似たようなものか」と値踏みしたのだろうか。

イエスの怒りに父親は、はじかれるように反応する。「信じます。信仰のないわたしをお助けください(9:24)」。息子の治癒を切に願い続け、長年の絶望に疲れて「期待半分」という予防線を張っていたのだろう。だが「[できれば]と言うか」という厳しい火花で目覚め、父親は元来の願いに立ち還った。彼の姿は、癒しの権能まで授かっていたながら議論に逃避していた弟子(9:14)と対照的に描かれている。父親と弟子、この両者によって「祈り」とは何であるか、そして何でないかが示される。

悪霊の追い出し(病の治癒)について、イエスは「この種のもの、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ(9:29)」と答えた。「信じます。信仰のないわたしをお助けください」と叫ぶがごとき祈り。父親は「おできになるなら」という予防線を放り出し、神の御前に「不信仰な私」という偽りのない姿で立った。一方、弟子たちはどうだったか。息子の病などそっちのけで議論に夢中だった。「信仰を得、権能を授かり、救われた私」に安住し、キリスト者という偽りの衣を着て神の御前に立っていた。どうやら信仰が「ならない」となり、根っこが浮いてしまったらしい。

宗教改革の「~のみ」の信仰は、「不信仰な私」において骨となり肉となっていく。恵みの言葉は必ずしも優しいわけではない。「[できれば]と言うか」という厳しい言葉を受けて目覚めることも多い。イエスの言葉で「敬虔な私」の偽りは打ち砕かれ、「不信仰な私」の真実が露わになる。この真実の祈りは聖霊の片鱗。だから「信じる者は何でもできる(9:23)」。祈りにおいて、聖霊と私の区分は滲む。



【おまけのひとこと】

不信仰を自覚する信仰 ではなく不信仰を誇る信仰はどうか 敬虔を嫌うあまりの開き直った信仰であろう 俗なる感覚が信仰を汚す 不信仰の自覚は朝の目醒め キリスト者の日々はそこから始まる